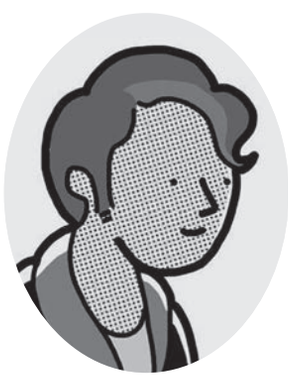
令和のサラリーマンが持つべき「働く姿勢」

『転職と副業のかけ算』著者　moto



1987年長野県生まれの32歳。都内のベンチャー企業で営業部長を勤めながら、副業で年収1億を稼ぐサラリーマン。自身の経験を基に、転職や副業、キャリアに関する知見をSNSで発信し、ツイッターのフォロワー数は8万人を突破。2019年8月には著書『転職と副業のかけ算ー生涯年収を最大化する生き方ー』を出版し、ベストセラーとなった。昨今では日本経済新聞や新R25などにも取り上げられている。

最近、「転職」や「副業」という言葉をよく耳にするようになりました。漠然とした将来への不安や、給与への不満などから転職や副業を考える人が増えているのだと思います。

日本は昭和時代に、右肩上がりの急速な経済成長を遂げました。その一端を担っていた制度に、「終身雇用制度」と「年功序列制度」があります。

しかし、日本の経済的躍進を支えたこれらの制度はもう終わろうとしています。戦後の経済発展を支えてきた日本企業が、相次いで「終身雇用」という仕組みの継続が難しいと明言したのです。

トヨタ自動車の豊田章男社長が終身雇用の限界について言及し、経団連の中西宏明会長が、終身雇用について「制度疲労を起こしている」と発表したことは、まだ記憶に新しいです。

こうした話題から分かるように「大企業＝安定」という概念は終わりを迎えようとしています。平成から令和へと時代は変化し、これまでの当たり前が、当たり前ではなくなろうとしているのです。今では大企業でもリストラを敢行する時代です。終身雇用を信じて会社に就職し、会社の指示に従うことに時間を費やしてきた社員が、ある日突然、上司から早期退職を勧められているのです。

「大手企業だから大丈夫」「会社がなんとかしてくれる」というのは幻想です。そして、この考え方は、時代の変化を掴み取る力も鈍くします。

昭和や平成時代における「安定」の定義は「大きな企業や組織への所属」にありました。大手企業に就職すれば、年功序列で順番に昇進することができる。給料も入社年数に比例して自然に上がり、クビになることもない。そう考えられていました。

しかし、現代において「安定した企業」は存在しません。

資金力やブランド力によって、「すぐに潰れることはない企業」は存在しますが、その組織に自分が所属する＝個人の安定も保証される、というわけではありません。企業が生き残る可能性と、自分がその会社で生き残れる可能性は、別問題なのです。

企業の看板を「錯覚資産」として利用するのはいいですが、「大手企業にいる＝自分は安定している」と自分自身が錯覚してしまうのは危険です。

これからのサラリーマンにおける「安定」の定義は、企業や組織に依存することではなく、「個人の能力（稼ぐ力）」にあると考えています。自分の価値を高めることでどこでも活躍できる人材となり「企業や社会から求められる状態」を作ることが重要だと思います。

自分でお金を稼ぐ能力を身につけるには、「会社にキャリアを用意してもらう」とか「給与はもらうもの」という企業依存姿勢から脱却し、「キャリアを自分で掴みに行く」「給料を自分で稼ぐ」という姿勢を持たなければなりません。

「自分はいつだって転職できる」「どんな環境でも、自分でお金を稼げる」という状態を目指すことが、令和を生き抜くサラリーマンの「安定」に繋がるのではないでしょうか。Ⓡ

次号は、voicy(株)代表取締役の緒方憲太郎氏にお願いいたします。

※本コーナーは、弊会ホームページでもご覧いただけます。